

宮崎兄弟と辛亥革命

平成5年に一般公開が始まった県指定史跡「宮崎兄弟の生家施設」(上小路)。皆さん一度は訪れたことがあるのではないだろうか。

年間およそ3千人が見学に訪れるこの施設は、敷地内に明治時代に立てられたかや葺き屋根の民家と味噌醬油蔵、そして宮崎兄弟とその一家の足跡と業績を展示した資料館が併設されている。

この地を訪れる見学者の中には、毎年、中国からの来訪者が含まれている。時に政府の高官であり、マスコミであり、修学旅行で訪れる小・中学生だ。

彼らが中国からはるばる荒尾のこの地を訪れる理由。それは荒尾に生まれた宮崎兄弟と、中国で「国父」と敬われる孫文とが結んだ強い友情が、「辛亥革命」を成功に導いたからである。その事実は今なお、中国の人々の心を強く捕えている。

来年は中国民主化運動「辛亥革命」から、100周年にあたる。その当時、西欧列強により半植民地化し、衰退の一途をたどっていた中国での革命の成功が、日本を含むアジアの平和、引いては世界の平和につながると確信し、革命家・孫文を支援したのが、宮崎兄弟の末弟・宮崎滔天に他ならない。

孫文と宮崎滔天

孫文は1866年、広東省香山県(現・中山県)翠亨村の農家に、第5子として生まれた。ハワイやアメリカに遊学し、革命以前は医師としても活躍した。

孫文が革命によって民主化を目指した当時の中国は、270年余り続いた清王朝の末期でもあった。

アヘン戦争以後の中国は、西欧帝国主義の侵出で半植民地化が進み、更に日清戦争の敗戦によって衰退の速度を加速させた。更に1900年に西列強列強に対する民衆抵抗運動「義和団事件」が発生し、北清事変として中国・西列強間の国家戦争に発展した。この北清事変での敗北で、中国は疲弊を極めていった。

このように植民地化・半植民地化、封建的社会である中国を、独立した民主国家へ変革することが中国革命の使命であったが、孫文らによる中国革命は、数度にわたる蜂起の失敗を繰り返すことになる。

宮崎家の末弟・滔天が孫文と出会ったのは、三兄・彌蔵を病で失った翌年、1897年の9月のことである。2年前に広州での最初の挙兵に敗れ、アメ

来年10月の「辛亥革命100周年」に向けて、荒尾市では今年10月から随時、プレ・イベントが開催される。この節目の年に、改めて兄弟らの業績に改めて光を当て、内外に「宮崎兄弟」を広く知らせることは、荒尾市の宝を輝かせるばかりではなく、荒尾市から日本と中国の友好の懸け橋を築くことも夢ではないからである。

11月20日(土)・21日(日)にプレ・イベントを控え、今号から4回にわたる、宮崎兄弟と辛亥革命、孫文と荒尾の関わりについて振り返ってみよう。

宮崎兄弟

宮崎兄弟と辛亥革命の直接的な関わりは、末弟・宮崎滔天によるところが大きい。兄弟と孫文が生まれたのは19世紀の半ばから後半にかけてであり、生きた時代は激動の時代であった。

日本では、1867年の大政奉還で江戸幕府が幕を閉じ、翌1868年に明治維新。1877年に勃発した西南戦争の終結とともに幕末維新期は終わり、明治維新政府が本格的に始動した前後である。

宮崎兄弟は、世襲の郷土の家柄であった宮崎家の九代目である父・長蔵(政賢)と母・サキとの間に生まれた。

リカ・イギリスで亡命生活を送った。その後日本に訪れた孫文は、滔天と横浜で初会見を果たすことになる。

滔天はその場で孫文の中国革命への主旨を問うた。そこで孫文は「人民自らが人民を治めるのが政治の正しい法則であると思う。共和主義こそその精神の表れだと信じている」と答えた。また孫文は「中国が西列強の手で引き裂かれれば、アジアの人権もまた失われるだろう。この革命は中国人のためだけのものではない」と語り、滔天は孫文に傾倒した。それから滔天は、孫文の最も良き協力者として終生支援し、中国革命に献身した。滔天は出会った翌月の11月には孫文を伴って荒尾に帰省し、孫文は2週間滞在している。その時孫文が持ち帰ったという民蔵の蔵書は、「三民主義」に影響を与えたとされている。

長兄・八郎は、1851(嘉永4)年、次兄・民蔵が1865(慶応元年、三兄・彌蔵は1867(慶応3)年、末弟・寅蔵(滔天)は1871(明治3)年にそれぞれ生まれている。

長兄・八郎は熊本における自由民権運動の急先鋒と称されながらも、西南戦争で若くして戦死する。その兄の精神を受け継ぎ育った下の三人の兄弟、民蔵・彌蔵・滔天は、社会の中にそれぞれに命を掛けるに値する課題を見つけ、戦いの中に身を投じた。

次兄・民蔵は、土地の均等共有こそ人類の基本原理であると説き、中国革命の成就のために奔走する彌蔵と滔天を陰日向に支え続けた。

三兄・彌蔵は、八郎が目指した自由民権運動が国内で行き詰まるのを目の当たりにし、打開先を中国革命に見出した。

そして志半ばで病死した彌蔵の思想を受け継ぎ、孫文を支援して「辛亥革命」の成就に奔走したのが、末弟・滔天(寅蔵)である。

幕末・明治という激動の時代に、日本の自由民権運動から端を発し、日本だけではなくアジア全体の平和の実現に夢を馳せたのが宮崎兄弟であった。

代表者会議で、孫文は臨時大統領に選出される。年明けて1月1日、孫文は臨時大統領に就任。中華民国が成立。2月に清国の皇帝・溥儀が退位し、清朝が滅亡した。その翌年に孫文は来日し、荒尾市の宮崎兄弟の生家を訪問した。その時の集合写真(左)は、滔天と孫文の強い友情を今に伝えている。



写真…(背景) 宮崎兄弟の生家。左側が味噌醬油蔵、右側が母屋。(右) 大正2年3月撮影。再来日した孫文を囲んでの記念撮影。中央左側の背広姿が孫文、その左隣の着物姿が滔天。背後の梅の木は現在も生家施設敷地内にある。

提供…社会教育課